

モンゴル考古学プロジェクト 2024（令和6）年度における研究成果のあらまし

いまから約 800 年前のこと、東北アジアの片隅にいた遊牧民の集団にチンギス・カンというリーダーが出現しました。彼は、ユーラシア大陸の東西にまたがるモンゴル帝国（1206-1388 年）という巨大な国家を造りあげました。

モンゴル帝国には、破壊と殺戮という負のイメージが強いですが、信教の自由などで民族の融和に努め、交通網を整備して通商を発展させたというプラス面もありました。東西世界の結びつきを強めたことで、大航海時代の序章、あるいはグローバル化の先駆けと評する研究者もいます。宗教や民族間の対立が深刻化している現在、いかにして持続可能な世界を創り出すことができるか。モンゴル帝国の歴史から学べることは、少なくないと思います。

ただ、モンゴルの遊牧民は、自分たちのことを文字に残しませんでした。反対に、食物の残滓や住居跡といった「モノ」は数多く残しました。私たちは、そうした「モノ」を通して、モンゴル帝国の実態に迫ろうとしています。それが「モンゴル考古学プロジェクト」です。

モンゴル考古学プロジェクトでは、モンゴル科学アカデミー考古学研究所と協定を結び、チンギス・カンが拠点をついたモンゴル国アウラガ遺跡で発掘調査をおこなっています。



アウラガ遺跡は、チンギス・カンの死後、彼を慰霊する祭祀場になりました。2024（令和6）年度は、前年度に引き続き、チンギス・カンの霊廟と考えられている 13 世紀中ごろに築かれた建物跡で発掘をおこないました。

前年度の調査で、霊廟建物の基壇（土台）の下から、直径 4m ほどの円形をした墓坑らしき落ち込みがみつけられました。今回確認したところ、寒冷地特有の凍結と融解が繰り返されたことによって起きる氷性土壌攪乱の跡で、墓坑ではありませんでした。そのほか、人為的な盗掘の痕跡もみつけられました。盗掘は、理化学的年代測定の結果、17 世紀ごろにおこなわれたようです。どうやら盗掘者は、基壇を貴人の墓塚と誤解したのでしょう。

2027 年には、チンギス・カン没後 800 周年を迎えます。本プロジェクトでは、発掘などモンゴルでのフィールドワークを中心に、引き続き謎の多いチンギス・カンの実像に迫りたいと考えています。



2024 年度の調査は、日本学術振興会科学研究費（基盤 A、代表：白石典之）、および白石に交付された平和中島財団、三菱財団の研究助成金によって実施されました。関係各位に心から感謝申し上げます。